

労働組合「労働者の力」(FO)は「北部の声」の編集長を通じて野中氏に答える

・・・投書欄の見出し

編集長殿、

「北部の声」4月15日水曜日号の紙上において、1週間以上にわたり続いているストライキを非難するオナンのトヨタの副社長の言葉で、われわれは醜聞の種にされた。

PSA やルノー社の地方では行われていることとは対照的に、強行法規の最低義務に反しての、一部操業停止日の補償を繰り返し拒否しながら、それと同じように、賃金労働者の平等を喚起しているストライキ参加者たちに向かって侮蔑的な言葉を投げつけながら、野中氏は、CGT や FO といった責任ある労働組合を人民裁判に引き渡すことを躊躇しない。

氏は、第1人者(エリック・ペカール氏)を政治的野心を持った策略を行っているとして、そして第2人者(ファブリス・カンピエ氏)を機関の支持がないなどと非難し、そしてこのトヨタのナンバー・ツールの言うところによれば、カンピエ氏の機関は彼の行動に対して不承認とするであろうと言いながら、「FOにおける彼の将来は本当に保証されているのかどうか」分っているのかなどという質問さえ提起している。

オナンの地にある FO ノール県本部組合は、同組合が FO の国、県、地方各レベルの機関の全面的支持を受けているファブリス・カンピエ氏と FO トヨタ班を、中傷ものであるとでも評価しているかのような主張の打ち消しを粘り強く行っている。

真実は、世界ナンバー・ワンのメーカーであるトヨタが、体は1つであるのに2つの顔を持っているということなのである。すなわち、

内面(うちづら)では、株主のために豪勢な利益をあげ、

外面(そとづら)では、労働者を絶望の淵すれすれのところにまで突き落とすような、補償なしの一部操業停止を強いて、この生産の担い手(トヨタ語でいうところのチームメンバー)にとっては、1ヶ月の手取り給料の1,280ユーロが、2週間の操業停止によって250ユーロ以上もカットされてしまうのである。

その結果はこういうことになるのである。

第1に、扶養の子供1人で家賃530ユーロの単身者の場合、出費を切り詰めたうえにも諸々経費を支払わなければならない、家計は掛け値なしに250ユーロの赤字になってしまう。

第2に、扶養の配偶者と子供2人の労働者の場合はどうかというと、天引き返済で借金をすることは既に銀行から拒否されてしまっているのである。彼は、家賃を支払い、月末には子供たちに滋養のある物を与えてやるために、家族の助け合いに頼らざるを得なくなるのである。

昨年クリスマス以降の4週間の操業停止の給料を、国から、つまりは納税者から、一部

財政支出を受けての 60%に代えて、100%支払ったからといって、それはトヨタのような多国籍企業にとって、何ほどのことになるというのであろうか？

ただ生存するためにだけ働いている賃金労働者に向かって、多少もったいぶって軽蔑と絶望の種を蒔きちらしたおかげで、トヨタは、恨みと反抗の種り入れをすることしか出来ないであろう。

編集長殿に格別のご挨拶をこめて

FO 県本部組合

書記長 ベルナル・ソエ